

風景の新しい見方を探る—実践例の紹介

○村上 修一*

1. はじめに

今年度、風景計画研究推進委員会では、人と空間及び人と人の新たな関係性の構築、あるいは将来の多様な体験や価値付けの共有を可能にする風景について、議論を深めることとなった。あいにく本稿では議論を深めることにならないかもしれない。せめて多様な体験や価値付けの方法論構築の糸口になればと考へ、投稿をさせて頂くこととなった。

筆者は、教育研究の場において、風景の新しい見方を学生達とともに探っている。卒業研究も含めると3桁に迫る件数の研究に関わってきた中で、無垢な学生達により見出された新しい見方に刺激を受けてきた。ただ残念なことに、これはひとえに筆者の指導力不足のせいだが、その多くが公表されないままである。いずれそれらについて総括すべきと社会的責務を痛感しているが、本稿では、学術雑誌等に掲載された公表済みのものに限り、研究で探り出された風景の新しい見方を紹介し、議論の糸口を提供させて頂くということでお許し願いたい。

2. 学生達により見出された風景の新しい見方

1) 工場景観に見る庭石組の構図

西川他(2018)は、庭石組の構成との共通点を工場景観に認めたり。具体的には、四日市コンビナートの工場景観を構成する煙突や鉄塔といった縦長の要素と、パイプ



図一1. 四日市コンビナートの工場景観 (撮影：筆者)

や建屋といった横長の要素との組み合わせや位置関係を、近江の作庭家、鈍穴の著した絵図『庭造図絵秘伝』の三尊石、蓮華石、盤石の組み合わせや位置関係と定量的に比較した。その分析結果にもとづき、縦長の三尊石が横長の蓮華石や盤石に下支えされるという構図との類似性が、工場景観の中にも見出せることを指摘し、縦長の要素と横長の要素との対比による動的平衡を、四日市コンビナートの工場景観の魅力としている。

工場景観については夜景を中心に評価が定着している感がある。四日市コンビナートについても観光名所となっている²⁾。また、工場景観を紹介する図書や写真集の刊行例も複数ある³⁾。さらに、学術研究においても、少し範疇は広がるが、人工構造物のつくり出す産業景観がテクノスケープと定義され、「景観異化」という美学概念から解釈が行われ、単純反復が生むミニマルアートとの類似性等が指摘されている⁴⁾。しかし、庭石組に通じる審美性を指摘したのは、本研究が初例と考えられる。

2) 内湖干拓地にて思うフランス式庭園の軸線景観

西村他(2019)は、フランスのヴェルサイユ宮殿庭園やヴォー・ル・ヴィコント庭園のような壮大な軸線景観を、内湖干拓地の外周堤防上の眺望景観に認めた⁵⁾。内湖とは琵琶湖の沿岸に形成された浅い水深の潟湖であるが、食糧増産の必要性を背景に、内湖の外周に堤防が築かれ、干陸化された湖底に道路、水路、圃場が格子状に配置され、干拓地化が進んだ。このようにしてできた内湖干拓地は、いわば底面に格子の模様が刻まれた大きなフライパンのような地形である。このような地形に着目した西村らは、軸線を中心とする景観が外周の堤防上より眺望されるのではないかと予想し、近江八幡市と東近江市に立地する大中の湖(だいなかのこ)干拓地を対象に検証を行った。

干拓地内の道路および排水路と外周の堤防との交点79ヶ所に視点を設定し、干拓地の道路、水路、圃場などの平面構成と周囲の地理的状況、干拓地や周囲の地形に関わる立体構成、堤防上から眺望される景観の構成について、文献資料や地図の調査および現地踏査の結果を分析し、軸線を中心とする景観の特徴を考察した。その結果、道路や排水路の軸線を中心に、その両側に圃場が並ぶという景観の特徴が明らかとなった。一方、そのような軸線と線対称の景観の特徴は、建物やその他の要素によって弱められることもわかった。さらに、フランス式庭園の既往研究^{6,7)}で指摘された錯視効果を生み出す勾配変化が、この干拓地にも認められたという。

ほ場整備の進んだ農地における道路や水路といった線形要素を、景観構成要素として積極的に評価する試みは

*滋賀県立大学 環境科学部 環境建築デザイン学科



図一 2. 大中の湖干拓地の軸線景観（撮影：筆者）

既にある⁸⁾。しかし、フランス式庭園に通じる審美性を指摘したのは、本研究が初例と考えられる。

3) 空家の植物に感じる「さび」と「彼方」

脇阪他（2017）は、空家の敷地内で植物が繁茂する様子に、あるものをあるがままに活かす景観の作法による沿道景観演出の可能性を認めた⁹⁾。具体的には、東近江市全域の主要道路沿いで107軒の空家を特定して敷地内の植物を詳細に記録し、植物構成の分類や、隣地境界付近の断面の分析を行った。その結果、全戸の植物が街路より視認可能で、大半は量感のある木本であることから、街路景観に一定の緑量を提供しているとした。

指摘は緑量の提供で終わらない。高木や中木が家屋を覆い隠す状況、木本、草本、ツル植物が混然一体となっている状況、草本が非舗装面を覆う状況、ツル植物が家屋からみつく状況を観察した結果にもとづき、人の手入れから一定の時間が経過した現れであり、古びたものに感じられる落ち着いた趣き、すなわち「さび」¹⁰⁾のある景観であるとした。さらに、空家と隣地との間の境界付近の断面分析の結果より、空家の植物が隣接する住宅の庭の背景となり得ること、隣家から空家の植物に対して視線は連続するものの、動線は不連続（隣家に立ち入ることはできない）であることから、此方（隣家の敷地内）からは到達することのできない彼方（空家の植物）を眺める、すなわち神仙思想を背景とする池泉や枯山水の庭¹¹⁾に共通する鑑賞形式の可能性を指摘した。

私有地として立ち入ることの許されない空家の敷地が、地域の庭として共用される事例やしくみの存在は、既に指摘されている¹²⁾。しかし、茶庭、池泉の庭、枯山水の庭に共通する鑑賞形式の可能性を指摘したのは、本研究が初例と考えられる。

3. 実践例にみる風景の多様な体験や価値付けの糸口

以上の3例には、以下のような共通点がある。いずれも、無垢な感性による緻密な観察を通して、庭の審美性

とは無関係と思える景観に、新たな価値付けの手がかりとなる類似性を探り当てている。そして、これらの発見は、庭の審美性に関する諸先輩方の研究成果、知見の蓄積によるところが大きい。造園分野の王道とも言える庭の審美性に関する知見と、一見無関係に思える景観との結びつけの可能性は、数多くあるとみる。人工知能で大量の組み合わせを試行し、続々と新たな景観価値を生み出す時代が、すぐそこに来ているのかもしれない。

補注及び引用文献

- 1) 西川夏生, 村上修一 (2018) 日本庭園の石組意匠に通じる工場景観の審美性—四日市コンビナートと庭造図絵秘伝の比較—: 都市計画報告集17: 26-29
- 2) 四日市観光協会: 四日市コンビナート夜景マップ: <https://kanko-yokkaichi.com/sys/wp-content/uploads/2020/03/327e6e854d4a74571543bd831b4d0297.pdf>: 日本語: 2021年4月22日閲覧
- 3) 例えば, 大山顕 著, 石井哲 写真 (2007) 工場萌え: 東京書籍, 小林哲朗 写真 (2014) 工場ディスカバリー-Z大型本: アスペクト, などがある。
- 4) 岡田昌彰 (2003) テクノスケープ 同化と異化の景観論: 鹿島出版会
- 5) 西村成貴, 村上修一, 轟慎一 (2019) 軸線の見通しから評価した大中の湖干拓地における景観構成の特徴: ランドスケープ研究82(5): 593-598
- 6) 平岡直樹 (2016) ヴォー・ル・ヴィコント庭園の立体構成と平面構成及び構成物による視覚効果の創出技術: ランドスケープ研究79(5): 397-402
- 7) 平岡直樹 (2018) ヴェルサイユ宮殿庭園の立体構成と平面構成及び構成物による視覚効果の創出技術: ランドスケープ研究81(5): 443-448
- 8) 曾和治好 (1998) 日常風景の復権 新たなる「風景への視線」: 『ベーシック・スタディ ランドスケープ・デザイン』昭和堂: 178-181
- 9) 脇阪樹里, 村上修一 (2017) 空家植物による街路景観の形成—東近江市の主要道路沿いを対象として—: 都市計画報告集16: 166-169
- 10) 柴田武, 酒井憲二, 倉持保男, 山田明雄編 (2005) 『新明解国語辞典第六版』三省堂: 579
- 11) 小野健吉, W.エドワーズ編 (2001) 『和英対照日本庭園用語辞典2001年版』奈良国立文化財研究所: 43
- 12) 寺田徹, 雨宮護, 細江まゆみ, 横張真, 浅見泰司 (2012) 暫定利用を前提とした緑地の管理・運営スキームに関する研究: ランドスケープ研究75(5): 651-654